

1959年に友人宅のガレージで初シェイプ。 以来、一度もシェイピングを止めたことはない

南カリフォルニアのサーフカルチャーの歴史において、意味深いサーフタウン、ダナ・ポイント。この土地で永年サーフショップを営み、サーフボードを作り続けているマスター・クラフツマンがいる。老舗レーベル「インフィニティ・サーフボード」のステイブ・ベイニーだ。今年67歳になるが、サーフィンもシェイピングもまだまだ現役。昔ながらのオールド・スタイルでのシェイピングには定評があるが、彼が作るウェイブ・ヴィークルは何もロングボードだけに留まらない。バリエーション豊かにショートボードから19フィートのパドル・レースボードまでを削る彼の深さが彼のクラフツマンとしての力量を物語る。妻や息子たちとともにレーベルとショップの看板を守りつつ、その半世紀を超える職人としてのキャリアにさらに磨きをかけていく。

*

ステイブは10歳のときに生まれ育ったミズーリー州セントルイスからロサンゼルスやサウスベイに家族とともに引っ越ししてくる。サーフィンははじめたのはその翌年の1958年。近所に住む4つ年上の16歳の少年がクルマでステイブを海に連れて行ってくれるようになると、パロス・ヴェルデスやハモサ・ビーチ、トランクス・ビーチなどサウスベイ全域をホームスポットにしてサーフできるようになった。

「この4つ年上の友だちは私の家から道を少し上がったところに住んでいた。彼の父親はガレージでボードを作っていて、私は遊びにいったらいつもそれを見ていた。そして私もボードを作ってみなさいと勧められたんだ。私の初シェイプは、そのガレージだった。そのとき私は12歳。それ以来、ハイスクールから大学まで学生時代も含め、一度もシェイピングを止めたことはない」

友人のガレージでの初シェイプから数えると、ステイブのシェイピングのキャリアはすでに55年にも及ぶ。実際に、大学に通いながらも彼はシェイパーとしてサーファーとしての立ち位置を築いていく。ハンティントンにあるゴールドデン・ウエスト・カレッジに通う傍ら、地元でもっとも古いサーフショップ「ゴディー」でシェイピングをはじめ、その他にも多くのレーベルのボードを削っていた。自らのレーベル「インフィニティ」を始めたのは、まだ彼が大学時代の1970年のことだった。いっぽうでこのころからステイブはタンデム・サーフィンの名手としても名を馳せ、1968年から約20年にわたりタンデムのコンペティションに出場している。3回しかなかったワールド・チャンピオンシップのすべてで優勝を飾り、USチャンピオンシップでは6回、ハワイのマカハでも6回、フランスのピアリッツでも6回優勝するという輝かしい功績を残している。ちなみにタンデムのパートナーは、妻のベアリー。ふたりは大学卒業後に結婚、タンデム同様にその後の人生でも息のぴったり合ったパートナーとして公私ともに支えあってきた。

「ゴディーで仕事をしたあとにインフィニティを立ち上げてからも、プラスチック・ファンタスティックやオーレ、その他いまはもうなくなってしまういくつかのレーベルでボードを作り続けていた。多いときは週に50本も削ったよ」

サーフボード・インダストリーで本格的に仕事をするようになったステイブは、まさに叩き上げの職人



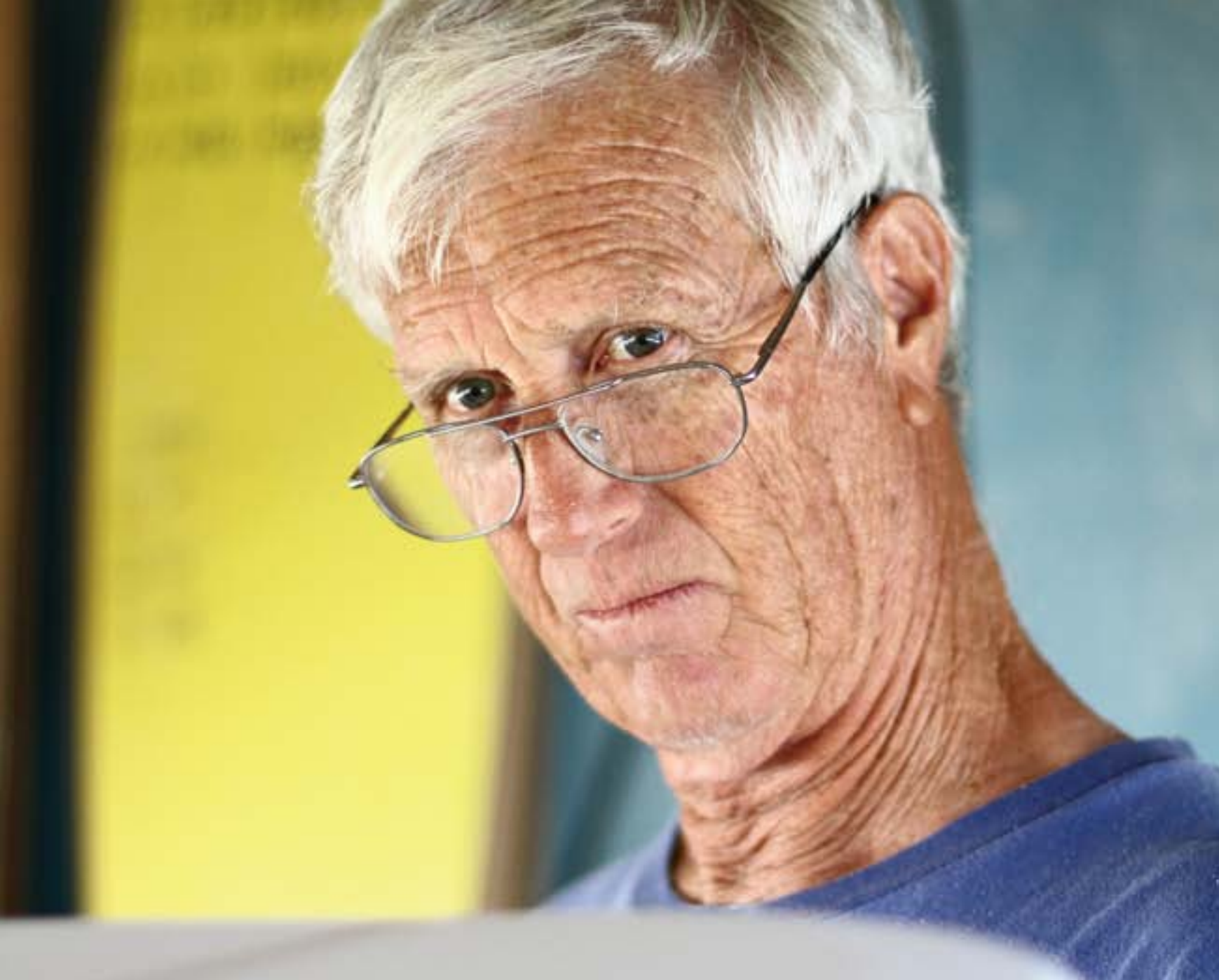
あらゆる道具と技術を駆使して、サーフボード作り一筋に実直に生きてきたステイブ。67歳のいまま、職人としての誇りを胸に秘め、毎日シェイプルームで仕事を続ける

として、デザイン・トランジション期にその腕を磨いたのである。

*

60年代にゴディーのところでシェイブをしたことで、ステイブはゴディーのオールドスタイルなシェイブを学ぶことができた。それは、サイドライトをつけずにトップライトだけでシェイプするというもの。古い時代のシェイピングはいまと違って時間もかかったが、そんななかで美しいフォイルを作り出す目と技術が養われていった。現在のステイブのシェイプルームはドアで閉ざされないオープンなスペースで、そのうえ窓もあるという、かなり変わったもの。しかしそれも彼のゴディー時代に培った技術とセンスを考えれば納得がいく。

ステイブとゴディーとは古い絆で固く結ばれていた。ゴディーの晩年、歳をとってあまりシェイブができなくなった彼と久しぶりに再会したステイブは、また再びゴディーのレーベル名でボードを削ることにした。かつて自分のもとで削っていたステイブだからこそ、ゴディーも安心して仕事を任せることができたのだろう。2年前にゴディーは他界したが、そのあともステイブが小規模でボードを削り続け、老舗レーベルのクオリティを守り続けている。1956年のゴディーのオールドスタイルの2009年モデルもステイブが譲り受けた。持つべき者に継承される、文字どおりカリフォルニアの遺産である。「私にはゴディー以外にもうひとり師匠と呼べる人がいる。ベン・アイバだ。70年代に私たちはカリフォルニアでアイバ・サーフボードを作っていたからね。だから私はステイブ・スワローをよく削っていたんだ。当時よくアイバもシェイプし

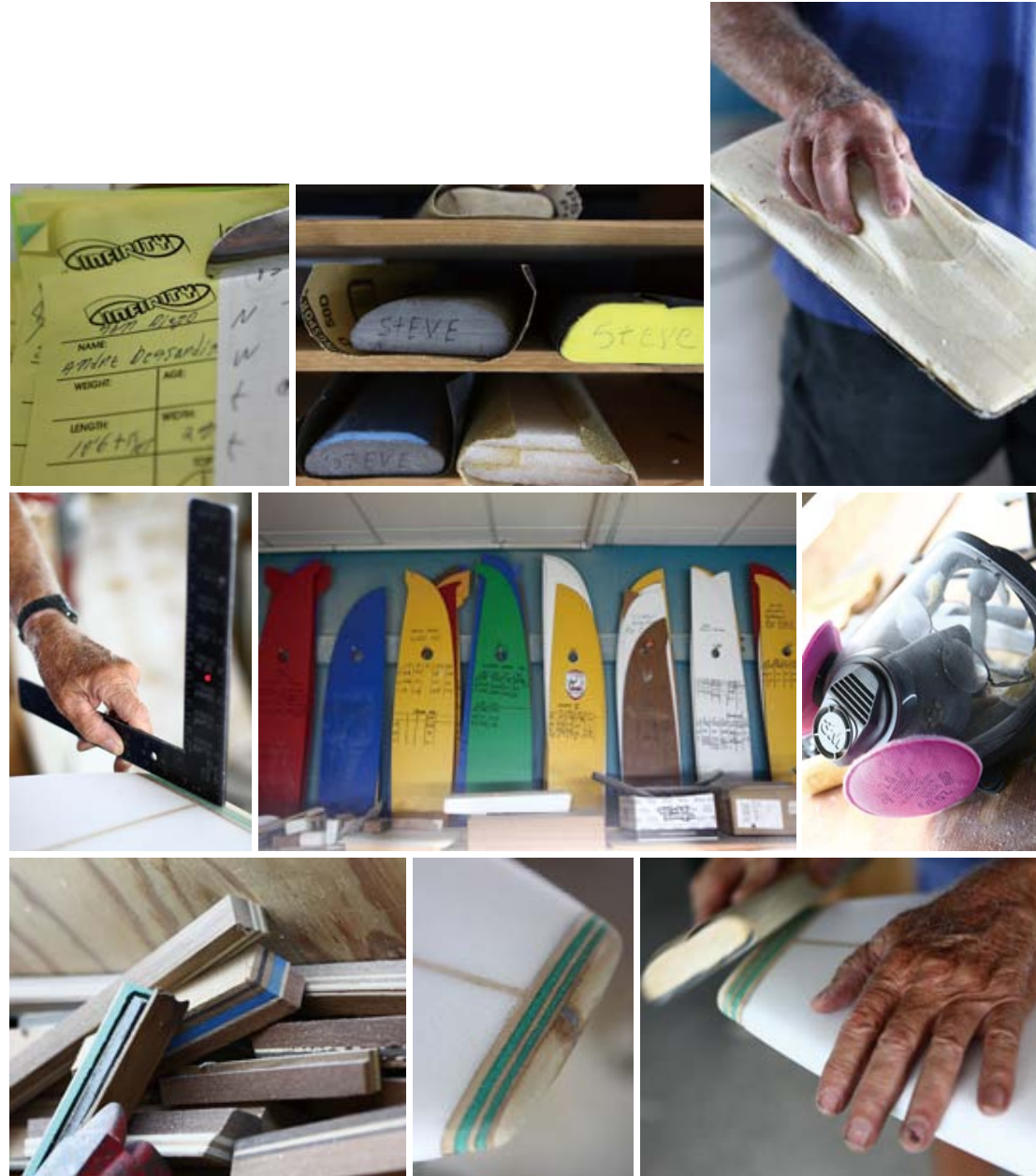


	#37 Surfboard Shaper	<h1>Steve Boehne</h1>	スティーブ・ベイニー
--	----------------------------	-----------------------	------------

1960年代からタンデム・サーフィンのチャンピオンとしても第一線で活躍してきたステイブ・ベイニー。自ら立ち上げたレーベル「インフィニティ」は44年にわたり南カリフォルニアのサーフシーンをリードし続けてきた。シェイプ歴は55年。そのクラフツマンとしての情熱と腕は、衰えるどころかますます冴え渡る。

Photos & Text: Takashi Tomita
写真・文/ 福田 隆

幅広いデザインのバリエーションから、
カスタマーの望む唯一無二の一本を生み出す



「自分の作ったものを手に入れるためにカスタマーは自分のところに来ている、と思っっているシェイパーもいるが、私はそうは思わない。シェイプする際にもっとも重要なポイントは、カスタマーの話を聞き、何を

たいいていレジェンド・クラスのシェイパーになると、得意とするデザインや頑なにこだわるモデルなどがあり、カスタマーの多くはそれを求めることになる。しかしそれはときとして、カスタマーがサーフボードにアジャストしなければならぬことにもなりかねない。その点に関してシェイパーは徹底したカスタマー主義を貫いている。
*
たいていレジェンド・クラスのシェイパーになると、得意とするデザインや頑なにこだわるモデルなどがあり、カスタマーの多くはそれを求めることになる。しかしそれはときとして、カスタマーがサーフボードにアジャストしなければならぬことにもなりかねない。その点に関してシェイパーは徹底したカスタマー主義を貫いている。

にカリフォルニアに来ていた。私たちは隣同士でシェイプしたよ。彼はハワイで有名なシェイパーたちとシェイピングしていたから、技をとてもたくさん知っていたし、最新のデザインについても学んでいた。私は多くのことをアイバから教わった。そういう意味で彼は師匠だね」
ステイブのショップにはいまま彼が削ってきた歴代のサーフボードがディスプレイされているが、そのなかにアイバのロゴが入ったステインガー・スワローもたしかに飾ってあった。ステインガーはサーフボード・デザインの歴史上、70年代を代表する強烈な個性をもつデザインである。またアイバ自身も革新的なデザイナーだったことを考えると、その時代にはアイバと仕事をともにした時間はステイブにとって貴重な経験だったはずだ。自分のレーベル、インフィニティとは別に、さまざまなレーベルで異なるボードデザインをシェイプしてきた経験は、ステイブのその後のシェイパーとしての可能性を大きく広げるものだった。

Mini Competitor ● 6'10" × 23" × 3 1/4" 2+1。ハイパフォーマンス・ロングボードのモデル、The Competitorのミニバージョン。ボトム全体にコンケーブが入っているため加速性が高い。回転性もよく、乗り味はまるでショートボードのよう。

Secret Weapon E.P. Hull ● 8'0" × 24" × 3 1/2" シングルフィン。短めで厚めのミッドレンジス。パドルしやすくターン性も高い。厚みを希望したカスタマーの要望に応え、Secret WeaponとE.P. Hullという2つのモデルを組み合わせたカスタムだ。

Style Master ● 9' 0" × 23" × 3" シングルフィン。グリーンなアウトラインをもつオールラウンドなボードで、もっとも人気の高いモデルのひとつ。ターン性も安定性もよく、もちろんノーズライドにもよい。その名のとおりスタイリッシュに乗りたいたい一本だ。

Rad Noserider ● 9'6" × 23 1/2" × 3 1/2" シングルフィン (2+1のオプションもある)。長いコンケーブをもつ、安定したノーズライディングに最適な1本。それでいてVeelによりターン性も高い。テールブロックはステイブのお手製だ。

D-MAR ● 9'9" × 23 5/8" × 3 1/4" シングルフィン。オールドスタイルが好きなチームライダーのために作られたクラシックなモデル。ソフトなレールとローロッカーが特徴で、乗り味は極めてスムーズだ。とても速い王道のロングボード。



Steve Boehne



(右上) デイブがデザインしたものをシェイプルームで実際に削るのが次男のダン。ときおりスティーブのシェイプルームに顔を出す。父親のシェイブからも学ぶことが多いようだ(右下) 長男のデイブはSUPの名手としてコンペティションでも活躍。スティーブも一目置くマルチサーファーだ。インフィニティのSUPはデイブがCADでデザインしており、そのクオリティは高く評価されている(左) スティーブと、タンデムパートナーだった愛妻ベアリー、そしてデイブ。ファミリーの結束は強い

「私はいま67歳。でもまだサーフィンしているよ。最近SUPに乗ることも多いけど、ロングボードも楽しんでる。トリップに行くなら90のロングボードを持っていく。ウチには幅広いデザイン・パリエーションのボードがあるからね」
 現在インフィニティのビジネスには妻のベアリーはもちろん、長男デイブも後継者として関わっている。とくにデイブはCADを駆使してショートボードのデザインとSUPの

求めているかを理解することだよ」
 スティーブはこれまで何万本ものボードを削ってきた。70〜80年代にはショートボードでもおそろしく1万本はシェイプしているだろう。こうした自らの豊富な経験から、カスタマーが望む唯一無二の一本をシェイプしたい。それが彼のシェイパーとしての信条だ。
 「サーフボードというのは目的に合わせてデザインされている。料理と同じだよ。料理ごとに味は異なるものだろう。サーフボードの場合は、ノーズライド用、ビッグウェーブ用、小さい波用などさまざまな目的や用途があり、さらには体格の大小などによってもデザインを変えなければならぬ。そのためにカスタマーが欲しいものを正しく知ること、そしてその人が要求するものをきちんと作ることが大切。ボードごとに、サーフボードごとに、サーフボードは異なるものであるべきなのだ。実際にはバラエティを好む。ひとつのデザインだけ削り続けていたら飽きてしまうからね」
 この言葉は、どんな注文にも応えることができるデザイン経験値と確かな技術があつてこそ言えるもの。職人としての秘めたる自信と誇りを感じずにはいられない。

デザインを担当。彼はSUPのコンペティションでも活躍し、ショートボードもロングボードも波と気分次第で乗りこなすマルチサーファーだ。歯科医が本業の次男ダンもシェイブを手伝っている。ふたりともかつてはショートボード、ロングボードのブローとして活躍していた。インフィニティのショートボードにはザ・ベニー・ブラザースというレーベルロゴがついている。いわゆるスラスタードだけでなく、ミニシモンズ系のデザインもあり、シヨップにはステイブ好みのバラエティに富んだボードが並ぶ。
 「歳をとってると何がクールなのかかわからなくなるものだ。だからこそデイブの役割は大きい。彼がど



ハンティントン界隈でもっとも古いショップ、ゴードーでもスティーブは削っていた。ゴードーの晩年にこのレーベルのボード作りを託され、ゴードー亡きあとにも削り続ける。1956年の10'6"テンプレートはいまスティーブのシェイプルームにある。50年代のテンプレートは実に貴重だ。まさにカリフォルニアの遺産である

んなボードを作るべきかを考え、彼がデザインしたものを私がシェイピングしたりもする。なにしろ私はこの仕事が好きだからね。そうだね、75歳まではシェイプし続けたいな」
 マーケティングも担当するデイブがビジネスの方向性を見極めているため、そのぶんスティーブはボード作りに専念できる。成長した息子たちがファミリービジネスを継ぎ、そのおかげでいまもシェイピングを楽しめる環境に、スティーブは満足している。75歳までといわず、好きなシェイピングを楽しみながら、カスタマーが求める唯一無二のサーフボードを削り続けてほしいものだ。レーベル名のインフィニティ(=永遠のごとく、いつまでもずっと……

デザインを担当。彼はSUPのコンペティションでも活躍し、ショートボードもロングボードも波と気分次第で乗りこなすマルチサーファーだ。歯科医が本業の次男ダンもシェイブを手伝っている。ふたりともかつてはショートボード、ロングボードのブローとして活躍していた。インフィニティのショートボードにはザ・ベニー・ブラザースというレーベルロゴがついている。いわゆるスラスタードだけでなく、ミニシモンズ系のデザインもあり、シヨップにはステイブ好みのバラエティに富んだボードが並ぶ。
 「歳をとってると何がクールなのかかわからなくなるものだ。だからこそデイブの役割は大きい。彼がど



老舗レーベル“ゴードー”のシェイブを託され、その貴重なテンプレートも譲り受けた

Master
Craftman

Steve Boehne